

2025年度事業報告（案）

（2025年1月1日～12月31日）

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

1. 事業成果

昨年度の活動方針では、都市型資本主義経済の限界から、「グローバルでの奪い合い」が始まる現状にあることを指摘したが、まさしく、この一年の大国の動きを見ると、指摘したことが現実として急速に進行してきた。こうした中、「権力を持たない個々のネットワークのつながり（マルチチュード）」において、「手作りの価値観」を作り出し、共有することの必要性を訴え、そうした活動の一端として Ed.ベンチャーのそれぞれの活動を捉えていくことを方針として掲げた。

この意味では、Ed.ベンチャーの昨年度1年間のそれぞれの活動において、今「私たちが大切にしなければいけないこと」をしっかりと意識し、参加者同士が確認し合いながら活動を展開できたと総括できる。

子どもたちや先生方がおかれている現状は、ますます厳しくなっている。

子どもたちは、学校でも家庭でも、画一的な価値観を押し付けられる一方で、序列化された関係性の中で日々を暮らしている。子どもたちの一番身近な「ともだち」はスマホであり、スマホが何でも相談できる相手になってしまった。

また、先生方は「働き方改革」という言葉が躍っているにもかかわらず、子どもたちと心をゆっくりと通わせる時間は保障されていない。先生は、「教壇に立つ」から先生なのではない。子どもたちから先生と認められるから先生なのである。子どもたちと先生方の距離が、広がってしまいつつあるのではないかと危惧される。

こうした厳しい状況だからこそ、「何を大切にしたいのか」というそれぞれの価値観につながる問いかけを、私たちはこれからも大切にしていかなければならないと考える。そうすることで、お互いを支え合うネットワークが少しずつ生まれていくのである。

昨年度の総括としてもう一点触れておきたいのが、「活動の広がり」についてである。Ed.ベンチャーの活動自体は現在でも多くの方に支えられ、多くの方の参加を得て進められてきた。また、「教育支援グループ」として、様々な教育場面を想定した活動を繰り返し広げてきた。その点は、昨年度もしっかりと幅広い活動ができたと自負できる。しかし、参加者の広がりとなると心許ないところがある。どの活動も、参加者が固定化している現状は否めない。

その理由や背景はいくつか考えられる。一つめは我々の活動に意義を見出せない。二つめは、活動は魅力的でも広報不足で認知されていない。三つめは、我々が取り組んでいるような市民レベルでの活動に、意味を見出せないムードが社会に広がり始めていること、である。

一つめと二つめはわれわれ組織の課題であり、常に自分たちの活動を振り返りながら解決していかなければならないだろう。

問題は三つめである。特に若い世代で、自主的な活動に「意味を見出せない」ムードが広がっているのではないかと心配される。自分が選んだ「教師」という職業であるだけに、そ

れぞれ教員一人一人が、何らかのこだわりを持ちつつ子どもたちの前に立ってほしいと願う。だからこそ、共に考え、学び、支え合う場所が必要になるのである。その一つが私たちEd.ベンチャーであってほしいと願っている。

社会の情勢も厳しく、子どもたちや学校の先生方も苦しい場所に置かれているからこそ、共に学び、考える場所が必要なのである。このことを2025年度の事業総括として確認し合いたい。

2. 事業内容

学校支援事業 ①理論学習会

【2025年事業目標】教育現場の状況を討論の中で分析し、客観視することで、今後の学校や教員のあるべき方向性を模索する。	
【事業総括】 2025年度は、昨年度に引き続き「捨てられない学校に変わっていくために」をテーマとしながら、『子どもたちにとって意味のある学校になるために』学校だからこそできることは何かを考えるべく、参加者と協議を重ねた。 前半の学習会では、現在の国内や世界情勢と教育の関係について状況を整理した。戦後の日本の教育を振り返ると、背景には経済界が求める人材の育成が図られており、国内や世界情勢における状況の変化は、現在の学校教育に大きな影響を与えている。新自由主義の煽りの中で、学校には競争・評価が付きまとい、教師は子どもたちに競争社会を生き抜く力をつけさせるために奔走している。一方で、増え続ける不登校児童生徒は、学校が「意味のないもの」として存在している現状を訴えている。学校の在り方を問われている中で、経済界が要求する人材の育成なのか、子どもたちの声を聞くのか、学校・教師がそのどちら側に立つべきかが重要であるという結論に至った。 後半の学習会の中で「先生が変わる、学校を変える」をテーマとした学びの多様化学校の教師の姿を観た。従来の学校の枠を超え、子どもたちの声を聞く教師の姿から、今後の教師集団がどうあるべきかの議論が展開された。また、行き詰まっている学校教育の現状から抜け出すために、総合的な学習の時間を活用できないかという提案や、従来の学習目標や学習方法を工夫することなど、子どもたちが求める学校に近づける可能性を見出す意見が交わされた。 今後、教師はどうあるべきなのか、子どもたちにとって意味のある学校とは何かを再確認することができた。少しずつではあるが、より具体的な提案や実践報告が語られ始めている。今後の学校教育の在り方について、子どもたちの声を聞き、対話を重ねることの必要性を実感した。	
担当者	●活動代表（理事）清水美希 柴田濤 村本綾 ○スタッフ 柿本隆夫

内容・日時・場所・参加者数	<p>① 5月17日(土) 13:45~15:45 「世界情勢と現代社会について分析する」 大和市シリウス 603 参加者 8名</p> <p>② 6月14日(土) 13:45~15:45 「日本の学校教育の現状を分析する」 大和市シリウス 606 及びオンライン (Zoom) 参加者 10名</p> <p>③ 8月30日(土) 13:45~15:45 「現代社会の分析を基に、今、子どもたちに伝えたいことはなにか」 大和市シリウス 603 参加者 8名</p> <p>④ 10月25日(土) 13:45~15:45 「今後の教育を展望していくために教員集団はどうあるべきか」 大和市シリウス 606 参加者 8名</p> <p>⑤ 12月13日(土) 13:45~15:45 「学校教育の今後の展望を考える」 大和市ポラリス room6 参加者 8名</p> <p style="text-align: right;">(のべ参加者数 42名)</p>
収入金額	23,500円 (受取負担金 23,000円 受取寄付金 500円)
支出金額	4,700円 (賃借料 4,100円 印刷製本費 600円)

学校支援事業 ②授業研究会

【2025年度事業目標】教室の実践を、子どもと教師の人間関係に閉じ込めず、より広い視野から検討できるようにするため、子どもを観察する観点を幅広く獲得すると同時に、観察の結果を社会構造と結びつけて検討できる幅広い知識の獲得を目指す。

【事業総括】

2024年に引き続き、「教室という空間をあらためて見直すこと」を目的に、どの子どもも排除されずに学べる学びの場について、実践の方向性を検討した。

特に2025年度は、「資本主義社会」に焦点を当て、この社会に特有の考え方や仕組みが、教育や教室にどのような影響を与えているのかを考えた。まず空間の視点からは、東京一極集中を進めてきた社会の仕組みが地方にも広がり、子どもや教師に規律や同調を求める傾向を強めていることが、研究成果として示された。一方で、「人と人との関係が深まるほど、学びも深まる」という実感は、都市部でも地方でも共通しているという実践報告もあり、教育実践には場所を超えた共通点があることが確認された。

次に歴史の視点からは、生活綴方教育が資本主義社会とどのように向き合ってきたのかについての講演が行われた。そこでは、1950年代までの生活綴方教育は、生産を中心とした社会の中で、労働の重さや、労働を通じた人間形成を大切にしていたが、その後、

消費をよしとする社会へと変化する中で、その力を発揮しにくくなっていった可能性が指摘された。このことから、社会の変化に応じて、教育のあり方を問い続ける必要があることが改めて確認された。

一方、2024年度から続いている若手教員による実践報告をもとにした検討では、教師自身が無意識のうちに行っている排除的な振る舞いに目を向ける必要性が、繰り返し指摘された。また、そうした無意識の前提は、校内研究や市内研究といった研究の進め方そのものにも深く組み込まれていることが確認され、変えていくことの難しさを実感する学習会となった。それでも同時に、それでも「負けない」ことも、参加者の間で共有された。

担当者	●活動代表（理事）清水睦美
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 3月29日（土）16：15～18：15 卒業論文「脱資本主義の思想としての地方移住の可能性を考える—教育観や子育てに対する考え方に焦点を当てて—」の検討 大和市シリウス 612 参加者 11名</p> <p>② 5月17日（土）16：15～18：15 現場からの報告による検討 大和市シリウス 603 参加者 10名</p> <p>③ 6月14日（土）16：15～18：15 講演「授業を通してみる子ども像と学校像」 講師 柿本隆夫氏（北杜市学習指導員） 大和市シリウス 606 参加者 14名</p> <p>④ 8月30日（土）16：15～18：15 現場からの報告による検討 大和市シリウス 603 参加者 7名</p> <p>⑤ 10月25日（土）16：15～18：15 講演「生活綴方は資本主義にどうむきあったのか」 講師 桑嶋晋平氏（日本女子大学准教授） 大和市シリウス 606 参加者 9名</p> <p>⑥ 12月13日（土）16：15～18：15 現場からの報告による検討 大和市ポラリス room6 参加者 9名</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数 60名）</p>
収入金額	4,500円（受取負担金 4,500円）
支出金額	14,937円（賃借料 1,800円 諸謝金 11,137円 消耗品費 2,000円）

学校支援事業 ③スタディツアー

【2025年事業目標】今日的な教育課題や社会状況の現場を実際に訪れることで、日常の課題を広い視野から考えることができるようにする。	
【事業総括】 今年度、6年ぶりに訪問を再開、「川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん」を訪問した。真夏の暑さの中、パーク内で元気に遊び回る子どもたちの姿はとても眩しかった。しかし、その中には、学校に居場所がなく、フリースペースで過ごしている子どももいると聞き、この子たちがいられない学校とは何なのだろうという思いになった。 総合アドバイザーである西野博之氏のお話の中で、「えん」と関わり、子どもの姿を知り、学校がその在り方を変えていった事例も紹介された。だが、それはまだ少数で、学校との連携はなかなか進んでいないという。子どもたちが体現するありのままの姿に向き合う覚悟を学校は求められているのではないかと。緩やかに粘り強く子どもたちとのつながりを保ち続け、自らを変えることができるしなやかさが必要であると感じた。	
担当者	●活動代表（理事）池田喬
内容・日時・場所・参加者数	8月21日（木） 「川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん」訪問 参加者4名 (のべ参加者数4名)
収入金額	4,000円（受取負担金4,000円）
支出金額	10,000円（雑費10,000円）

学校支援事業 ④外国人の子ども理解のための学習会

【2025年事業目標】外国人の子ども現状や課題を理解する場、外国人の子どもに関する専門的な知識を学ぶ場を企画運営する。	
【事業総括】 ① 学習会 3月は修士論文報告会を行った。河村優花氏からは「移民二世女性女性の進路決定をめぐるダイナミズム」について報告された。この研究は、外国にルーツのある女性たちの進路が「学校」・「地域」・「家庭」という3つの空間で、どのような社会的要因によって形成されるのか、フィールドワークとインタビュー調査に基づき分析している。学校では同化志向によりジェンダーやエスニシティの問題が不可視化され、地域支援でも十分な対処がなされず、困難が家庭へ還流される現状が指摘された。結果として、彼女たちの進路は家父長制や経済的要因の影響を強く受ける家庭内で決定される傾向にあり、既存の支援からこぼれ落ちる複合的な課題が浮き彫りにされていた。 タイプ マリエラ氏からは「ペルー日本人移民の生活史とアイデンティティに関する一考察」について報告された。ペルー日本人移民である大河家104名の生活史を事例に、	

排日運動による山岳部（フニン県）への移動経験が、一族のアイデンティティ形成に与えた影響を考察したものである。特に、戦前移民と現地先住民が互いに社会から疎外された存在として、親近感を伴う「穏健な分離」の関係にあったが、現代のディアスポラ世代（4世）が直面する葛藤にも焦点を当て、日本とペルーの狭間で「自分は何人かわからない」というアイデンティティ・クライシスに陥る実態を浮き彫りにしていた。

この報告会の感想から、「ジェンダーによる自身の進路決定に着目することで、自分と似た他者を通してその経験を言語化することでわかることがたくさんあると感じた」「適応させる教育にならないようにしなければならない」「アイデンティティが分からなくなるそのはざまを生きる当事者として、浮き彫りにできるような価値のあるロールモデルの発表だった」と振り返り、身近な似た立場の人物と重ねていた。

4月は「国際教室のコーディネーターとしての役割～国際教室担当の実践を通して～」をテーマに大和市中学校教諭の菊地一輝氏にお話ししていただいた。

外国につながるのある生徒の日本語支援において、テキストを使って学んだことを担任の先生や友だちにインタビューする活動などを行う実践によって、教室で共通の趣味を持つ友だちに出会って会話の力が伸びていく生徒、「絵でわかるかんたんかんじ」で学んだことが社会や国語の教科書に出てきた時に少しずつ読めるようになって理解が深まった生徒など、まずつながりを作る取り組みの重要性を確認した。

中学生なので、定期テストや高校受験に向けて、教科の言葉や教室での指示が聞き取れるようになりたい生徒も多くいたので、生徒のニーズに応じて、取り出しだけでなく入り込みも行った事例も提供していただいた。

生徒のモチベーションや自己形成の状況によっては国際教室の取り組みを拒む生徒も少なからずいるが、菊地氏の取り組みでは、お節介と思いながらも生徒の困り感や生徒自身が取り組みたい意欲を丁寧に聞き取り、教員と生徒が互いに信頼し合って取り組んでいる事例だった。

生徒が困ることは学習面だけでなく、宗教上の不安、保護者が帰省する間の生活、親子間で母語が異なることで思いの意思疎通が取れない、日本の高校入試の仕組みが分からない、公的書類の書き方がわからない、など保護者と生徒の生活面の支援が日本での生活の安心感を生んでいることも参考になった。

国際理解教育の推進、というより日本人の生徒にもルーツのある生徒の国に興味を持ってもらえる掲示物を作って発信することにより、片隅にある国際教室ではなく、確かにルーツのある生徒がここにいるという存在を示し、生徒たちが居心地のよい空間にしており、様々な事例がとても参考になる学習会となった。

参加者からは、「菊地先生の思いやりをとても大切にされていたことがよくわかった。」「限られた時間や人手の中で、他の関係団体とも連携しながらどんな支援ができるか考えていくことが大切だと思うと同時に、国際教室にお任せではなくみんなで国際教室の生徒を支援していく意識を持ちたい。」と振り返っており、これからの国際教室運営や生徒との関わり方に多くの刺激となった。

8月には「外国人の子どもが置かれている状況を考える～映画上映『はざまー母語のための場をさがして』を通して」をテーマに、映画監督の朴基浩氏が制作したドキュメンタリー映画を上映し、朴氏と日本女子大学の清水陸美氏のパネルディスカッションを通し

て日本における移民をめぐる問題や多文化共生について考えた。

急増する外国にルーツのある子どもの教育環境と法的障壁に焦点を当てた。母語は「思考の土台」として不可欠だが、政府方針は「責任」の明記に至らず、各コミュニティは教室の「場所確保」に苦悩しながら自助努力を続けている。

特に深刻なのは、約10万人超が該当する在留資格「家族滞在」の不安定さだ。就労や奨学金の制限に加え、親の状況次第で生活基盤を失う構造が、進学・就職の大きな障壁となっている。子どもの学習権保障が制度の不備によって阻まれている現状に対し、公的支援の拡充と在留資格制度の見直しが急務である。

参加者からは、「言語的や法律、生活、コミュニティ、アイデンティティなど至る所で狭間にいる可能性があることに改めて実感した」「制度上の責任が曖昧な中であっても、せめてかれらの母語を尊重し、可能な限りの資源を探したい」「法的な狭間について正しい知識を持ち、早期から利用可能な奨学金情報を集めたり、専門機関へつないだりすることが資源になる」など、現在の状況の理解を深め、かれらの資源となりうるものを模索することの重要性を振り返った。

② 事例研究会

今年度は、研究会スタッフからの事例の提供に加えて、日本語指導員や中学校の教科担当の先生から事例を提供していただいた。不登校や学校生活への適応が難しい子どもや家族の問題を抱えている子どもの事例が主だった。協議の中で、子どもとの向き合い方を学ぶことができた。学校は子どもを育てる場であることや子どもが選択し納得する場面をどう作っていくか、子どもの資源を増やしていくことなど支援者の姿勢が問われることがあった。子どもとの向き合い方については、2回連続で事例提供をしていただいたケースがあった。1回目の研究会での協議を受けて気になる子どもとの対話を始めると、子どもとの距離が縮まった。そして子どもが先生との対話で多くのことを語り始め、また先生もより多くの子どもとの対話を始めた。その対話の様子がほかの先生たちの刺激となり子どもとの対話を始める先生が出始めているといった報告が2回目の研究会で行われた。昨年度の学習会のテーマであった「対話」が実践に結びついた事例研究となった。また、今年度は、不登校や不適応が事例としてあげられることが多く、不登校や不登校傾向のある外国ルーツの子どもが増えているのではないかということを感じた。学校が外国ルーツの子どもたちが安心して生活できる場所となるには、学校が学力主義・能力主義の場所からもっと緩やかな場所になることが必要なのだと痛感した。

担当者	●活動代表（理事）西岡歩 ○スタッフ 篠原弘美
内容・日時・場所・参加者数	① 学習会 3月29日（土）13：30～15：30 修士論文報告会 「移民二世女性女性の進路決定をめぐるダイナミズム」 報告者：河村優花氏（日本女子大学大学院生） 「ペルー日本人移民の生活史とアイデンティティに関する一考察」

	<p>報告者：タイペ マリエラ氏（日本女子大学大学院生） 大和市シリウス 612 参加者 15 名</p> <p>4 月 22 日（月）19：00～21：00 学習会「国際教室のコーディネーターとしての役割 ～国際教室の実践を通して～」 講師：菊地一輝氏（大和市中学校教諭） 大和市シリウス 612 及びオンライン（Zoom） 参加者 15 名</p> <p>8 月 4 日（月）13：00～16：00 映画上映と学習会 映画「はざまー母語のための場を探してー」 （日本と出身国を往来する移民の子どもの社会統合を見据えた 言語教育ー母語・公用語の補習教室を地域の「多文化共生」の 拠点にプロジェクト制作） 講演：講師 清水睦美氏（日本女子大学教授） 対談：講師 朴基浩（ぱくきほ）氏（映画監督） 大和市シリウス 612 参加者 10 名</p> <p>② 事例研究会 オンライン（Zoom） 水曜日開催：6/18 9/17 10/16 19：00～21：00 土曜日開催：5/24 7/26 11/22 13：30～15：30 のべ参加者 21 名</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数 61 名）</p>
収入金額	20,500 円（受取負担金 10,500 円、受取寄付金 10,000 円）
支出金額	30,137 円（賃借料 11,000 円 諸謝金 11,137 円 消耗品費 8,000 円）

学校支援事業 ⑤インクルーシブな社会を目指す学習会

【2025 年度事業目標】 インクルーシブな社会はその理念が叫ばれながらも、いまだ現実
は程遠いものがある。しかし、インクルーシブの考え方は、社会の在り方の根源に関わる
問題であり、私たち Ed.ベンチャーとしても、共通理解を深めるとともに、行動として何
ができるかを考えていきたい。

【事業総括】

2025年度は、インクルーシブがこれだけ叫ばれるなか、学校現場での“インクルーシブでない”現状について報告し合うことから始めた。

国際級在籍の生徒に対して試験問題にルビを振らない教員がいたり、以前ほど教員が家庭訪問を積極的に行わなくなった実態など、様々な苦しさを抱える子どもに対して、教員自らが責任を子どもに押し付けてしまっている現状などが語られた。子どもがお互いを認め合い、受け入れるまでに時間が以前よりもかかる現状も報告され、教職員集団や保護者の意識についても話題が及び、有意義な時間となった。

こうした実態の背景についても学習会の中で話題にした。そこでは、一昔前の教育現場では、教師が子どもたちの身近な大人として、話をきいてくれる存在であったのではないかと、それが最近では、学校の中のことは見ているけれど外へ目が向かなくなっていて家庭の状況も見えにくくなっているのではないかと。学校現場の実感として、“解決”に向けて動いているけれど、できることは色々な機関に繋ぐことくらいになってしまっているのではないかと、といった意見が多く出された。

学習会では、授業を通してインクルーシブな空間を創り出している実践として、広島大学の草原和博先生をお招きして講演していただいた。

先生は、教育委員会とも協働して広島市の小学校をベースに、九州や北海道の小学校の教室をデジタルでつなげ、社会科の授業として、新しい公共的課題について、デジタル空間の中でみんなと一緒に学ぶ取り組みを進めている。インクルーシブの観点では、学校に来られない子どもが自宅からでも、過疎によって一人学級で学習する子どもも、それぞれが自分のペースでデジタル空間に参加できるよう、配慮されてきた。草原先生が進めているこの学びのデジタル空間の特徴としては、環境の違ういくつもの学校が同じ空間で学び合うことができること。そこには様々な立場の「市民」が参加していることである。また、最大の特徴だと感じたのは、学習のテーマとして取り上げる「公共的課題」が、今まであまり学校教育が積極的に取り上げなかったようなテーマを正面に据えていることだった。例えば、「交番の配置は、過疎地と生活密集地とでは、どのようなバランスで配置すべきか？」こうしたテーマについて、それぞれの学校の地域事情を背景に意見を出し合うのだ。

先生の講演は今までにない視座を与えてくださり、とても今後の参考になるものだった。

今年の活動も、充実したものであったと総括している。

担当者	●活動代表（理事） 山口貴子 森尾宙 ○スタッフ 柿本隆夫 篠原弘美
内容・日時・場所・参加者数	3月29日（土）10：00～12：00 「参加者それぞれの現場から排除の実態を報告し合い、現状を認識する」 大和市シリウス 612 参加者 11名 8月24日（日）13：40～15：30

	<p>「なぜインクルーシブな社会が実現できないのか、その背景を考える」</p> <p>大和市シリウス 603 参加者 7名</p> <p>12月14日(日) 13:30~16:30</p> <p>講演「授業デザインからインクルーシブを考える～デジタルシチズンシップの取り組み～」</p> <p>講師 草原和博氏(広島大学教授)</p> <p>大和市ポラリス room3 参加者 15名</p> <p style="text-align: right;">(のべ参加者数 33名)</p>
収入金額	17,000円(受取負担金 10,500円 受取寄付金 6,500円)
支出金額	14,069円(賃借料 1,500円 諸謝金 11,137円 消耗品費 1432円)

外国人支援事業

⑥ 子どもの居場所・学習支援教室(エステレージャ☆ハッピー教室)

【2025年度事業目標】外国にルーツのある子どもの居場所作りと学習支援を行う。さらに家庭や学校の様子を聞いて可能な範囲で支援を行い問題の解決を図る。

【事業総括】

2025年度は昨年度から継続して、日本語がほとんどできない生徒や、母国の高校を卒業して来日した生徒の高校進学を支援し、全員高校入学を果たした。

次に今年度は座間市内の小中学校に在籍する生徒の増加がみられたが、まだ教室に通い始めて間もないこともあり、多少緊張感が感じられるものの徐々に馴染みつつある様子が伺える。

また、日本語がほとんどできない生徒が複数人通室しているので、日本語の習得に向け工夫を凝らした取り組みを行った。

さらに、この教室を卒業して高校に進学した生徒や、専門学校を経て就職した卒業生が教室を訪問してくれることがあり、エステレージャ・ハッピー教室の活動の厚みが増してきているのを感じる。

① 学習支援

- ・教科学習は宿題やワークブックを中心に個別に対応し、それぞれの能力や興味関心に応じて指導した。
- ・定期試験の対策を同じ中学校の1年先輩が教えるという場面があり、縦のつながりも見られた。
- ・日本語指導は日本語教材のゲームを活用し、学習が継続するよう工夫を凝らした。

すると他の子どもも参加し活発な活動になった。

- ・高校受験者には受験勉強や面接指導のみならず、全ての過程において支援を行い、合格決定後も入学まで支援を継続した。

② 語り合いの場作り

学習が一段落した後、皆でカードゲームやパズル、ボール遊びなどを行った。日本語がまだあまり話せない子どもが自然な状況で日本語を発することがあり、日本語の習得の場にもなっていた。また、リラックスした雰囲気の中で子どもたち同志やスタッフたちと会話がなされ、縦、横の関係が構築される場となった。

今年度は各自の旗を作る活動を始めたが、途中で頓挫してしまった。しかし、子どもたちが自分が好きな絵を描くことに意欲を燃やし、彼ら彼女らの絵の才能を知ることができた。なかには大和市の絵画展をはじめ他の絵画展にも入選し表彰された子どももいた。

③ 母語教室

現在スペイン語話者の子どもの数が卓越しているが、定期的に教室に参加する子どもが少なく、母語教室を開催するに至らなかった。

④ 保護者面談

1学期の面談では、子どもの学校や家庭での様子を聞き取ることができ、特に家庭で大きな問題を抱えていることが分かった。そのことから母親への支援の必要性を感じ、また母親からの要請もあり、日本でのより安定した生活と好条件の就職ができるよう母親への日本語の指導を開始した。母語で家庭や子どもの学校の問題を語り合える環境は、母親にとって貴重な時間になっていた。

⑤ 教室運営

- ・従来通り、登録制をとり登録料として1学期につき100円を徴収した。
- ・3学期制（1学期4月～8月、2学期9月～12月、3学期1月～3月）

⑥ スタッフの育成

- ・積極的に参加してくれる学生ボランティアスタッフが増えてはいるが、より一層の人員増が望まれる。
- ・毎回教室開催前後にミーティングを行い、子どもたちの様子や問題点、今後の取り組み等を話し合い情報を共有するとともに、意見交換の場とした。
- ・外国にルーツがあるスタッフの母語教室は、対象となるスタッフが就職等で時間が取れず開催できなかった。

担当者	<p>●活動代表（理事）福島聖子</p> <p>○スタッフ 角替弘規 篠原弘美 保坂克洋 根岸佐織 高島ヒトミ 佐藤ひより ジェマイマ・ルース・アゴコプラ ビジュアル・アイコ 河村優花 川上ひなの イ・チャンジョン 島菜月</p>
-----	---

内容・日時・場所・参加者数	<p>① 毎週土曜日 10:30 - 12:30 1/11 18 25 2/1 8 15 22 3/1 8 15 22 29 4/5 12 19 26 5/10 17 24 31 6/7 14 21 28 7/5 12 19 26 8/2 9 23 30 9/6 13 20 27 10/4 11 18 25 11/1 15 22 29 12/6 13 20 大和市立林間小学校図工室 大和市立ベテルギウ 2F 会議室 大和市立シリウス 607 609 大和市立ポラリス room3 受験対策勉強会 1/6 13 20 27 30 2/6 13 あつぎ市民交流プラザ 12/24 25 26 10:00～15:00 部室 1/15 27 29 2/4 2/12 16:30～18:30 部室</p> <p>② ①に同じ ③ 開催実績なし ④ 4月 8月 12月 ⑤ ①に同じ</p> <p style="text-align: right;">(のべ参加者数 206名)</p>
収入金額	253,700 円 (受取負担金 3,700 円、受取助成金 250,000 円)
支出金額	299,923 円 (給与手当 46,370 円 保険料 16,385 円 賃借料 83,875 円 諸謝金 96,889 円 印刷製本費 265 円 消耗品費 44,479 円 旅費交通費 11,660 円)

子ども支援事業 (該当事業なし)

学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

⑦ 教育相談

【2025 年事業目標】

相談事業を通して、ニーズの把握と必要な事業の展開の仕方を検討する。

【事業総括】

学校・教師・行政・子ども・保護者・外国人当事者・支援団体等の各種相談に応じることを目的としており、2025 年度は 3 件の新規相談があり、2 件は継続対応になった。

2019 年度より「すたんどばいみー基金」から引き継いだ相談業務には例年通りの対応

<p>を行った。多言語若手通訳の発掘と翻訳依頼については、新たに1名を登録することができたものの、派遣依頼は当法人の事業であるエステレージャ・ハッピー教室への通訳派遣のみであり、外部からの派遣依頼はなかった。</p>	
担当者	<p>●活動代表（理事）松永雅文 林幹也 ○スタッフ 清水睦美 篠原弘美</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>①（2019年より継続）「すたんどばいみー基金」から移管された相談。該当者はS・E・R・Hの4名。それぞれ社会人として活動しているため、必要に応じて面談等を行った。</p> <p>② 多言語若手通訳派遣事業</p> <p>A 通訳登録6名（ベトナム語1名、カンボジア語1名、タガログ語（+英語）2名、スペイン語2名）なお、通訳翻訳依頼がほとんどないこともあり、通訳登録そのものが事業期間の最後になってしまった。登録方法の改善を検討する必要がある。</p> <p>B 翻訳依頼0件</p> <p>③ 新規相談：3件</p> <p>a 保護者相談（1件 2025年8月） 大和市内保護者の方より、小学生の子どもの学校での対応に関する不信感の訴えがあり聞き取りを行った。市内の関係機関にも相談している様子から、学校や教師の論理の説明を行い、それを踏まえて保護者としての対応の可能性を提示した。その後、相談の継続はないので、1回の相談で終了と判断している。</p> <p>b 当事者相談 T（2025年3月開始～） 韓国ルーツ T の大学院進学への支援を開始した。保護者による精神的虐待がひどく、転居支援も同時に行った。月1回の面接を行いながら、生活基盤の作り方を支援している。</p> <p>c 当事者相談 O（2025年5月開始～） ナイジェリアと日本にルーツがある O の大学受験の支援を行った。すたんどばいみー経由での相談で、保護者による虐待が認められ、中学での不登校経験によって通信制高校に進学した3年生である。大学生3名による支援を確保し、48回の学習支援を行った。なお、現在両親は離婚しており、母子家庭であるが、母親からの虐待がひどく、学習に取り組めない時期があり、学習支援とは別に個別相談を1回行った。</p>
収入金額	0円
支出金額	27,840円（諸謝金27,840円）

学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

⑧ 普及啓発活動

<p>【2025年事業目標】 社会に対して当法人の理念と活動を紹介しながらその位置づけを明確にし、社会的に弱い立場に置かれた人々に対する支援の重要性を普及・啓発する。これまでの活動テーマに加え、2025年度も「平和」に焦点を当てた情報発信に留意する。</p>	
<p>【事業総括】</p> <p>当法人の理念と活動を紹介し、社会的に弱い立場にある人々への支援の重要性について訴えるため、以下の活動を行った。</p> <p>① 広報紙「Ed.ベンだより」はNo.67～72の計6号を発行した。</p> <p>② ホームページは各事業内容の進行に合わせ、随時告知と報告を更新した。またスマートフォンによる閲覧時の表示の最適化を図った。アクセス数は9565で、前年比1223減となった。</p> <p>③ 2025年度パンフレット（三つ折り版）を作成・配布した。</p> <p>④ 「平和」に関する情報発信として、Ed.ベンだよりやホームページの理事推薦本のコーナーにおいて「平和」をテーマとした情報を掲載した。「脱・反原発」と「女性」に関する内容については積極的に取り上げるに至らなかった。</p> <p>⑤ 資料・書籍の管理販売として、教育講演会の会場と部室にて書籍を販売した。</p> <p>⑥ 他機関・他団体との関係構築として、新たな関係構築は行われなかった。</p> <p>⑦ 渉外（研究者対応を含む）として、子どもの居場所・学習支援教室に対する教室見学及び研究会参加の依頼があり、対応した。</p> <p>⑧ 会員に対する情報提供として、メーリングリストを用いた情報提供に努めた。</p>	
担当者	<p>●活動代表（理事）角替弘規</p> <p>○スタッフ 池田喬 清水睦美 柿本隆夫</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 大和市を中心に教育関係・国際関係団体に配布(約2000部/回)</p> <p>② 随時（担当者打ち合わせを原則月1回開催）スマホ対応(7月)</p> <p>③ 2025年度パンフレット配布 4月配布（約2500部）</p> <p>⑤ 売上合計0円</p> <p>⑦ エステレージャ教室見学1件（4月）研究会参加1件（6月）</p> <p>⑧ 正会員向け30回、賛助会員向け29回</p>
収入金額	45,000円（受取助成金45,000円）
支出金額	386,693円（印刷製本費93,000円 通信運搬費177,512円 消耗品費53,976円 業務委託費60,720円 雑費1,485円）

学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

⑨ 教育講演会

【2025年事業目標】現在の社会状況を踏まえて、教育講演会で扱うべきテーマを検討する。それを踏まえて、参加者に問題提起し、互いに議論する教育講演会を企画・運営する。

2025年度教育講演会は、「今の世界の現実を自分事として未来に向けて受け止める」として、講師に「核政策を知りたい広島若者有権者の会（カクワカ広島）」共同代表の田中美穂氏を迎えて開催した。

田中氏からは、核兵器禁止条約をはじめ核政策に関する考えを国会議員へ聞く面会の実施、平和に関する各種イベントの開催など、核兵器のない世界の実現に向けた、広島の若い世代の取り組みが語られた。田中氏自身は元々福岡出身で就職を機に広島に移住、広島での多くの出会いから、平和に関する取り組みを行っているという。その中で出会った、「祈るだけでなく、具体的な行動を」という言葉が紹介された。平和に関することはもちろん、私たちを取り巻く様々な課題に対して、どう向き合うべきなのかを改めて考えるものとなった。

講演後には、大学生や若手小中学校教員など、若い世代をパネラーに迎え、パネルディスカッションが行われた。それぞれが受けてきた平和教育の振り返り、現在の日本や世界の状況の認識などについて、意見が交わされた。さまざまな情報が流れ込んでくるネット社会、投資など、お金の奪い合いを煽る経済社会についてなど、現在の社会状況を懸念する意見が出された。「何かの犠牲の上に、私たちの現在の平和があるのではないか。核兵器に関する問題だけでなく、ジェンダーに関する問題などにも責任を負わなければならない若い世代だが、次の世代には残したくない。問題をみんなで分担してでも、前へ進めたい」という田中氏の言葉で、パネルディスカッションは締めくくられた。

12月2日には、2026年度講師に決定した、桜井千恵子氏（関西学院大学教員）の著書『教育は社会をどう変えたのか』『ポンコツでいこう』2冊の講読会を実施した。本の感想の共有、講演会のテーマ検討などを行った。

担当者	●活動代表（理事）柿本隆夫 ○スタッフ 池田喬
内容・日時・場所・参加者数	① 教育講演会 「今の世界の現実を自分事として未来に向けて受け止める」 講師 田中美穂氏 （「核政策を知りたい広島若者有権者の会」共同代表） 2月16日（日）13:30~17:00 会場 富士見文化会館 101号室 参加者 22名 ② 2026年度教育講演会講師著書講読会 12月2日（火）20:00~21:30 オンライン（Zoom）

	参加者 8名 (のべ参加者数 30名)
収入金額	59,760円(受取負担金 21,500円 受取寄付金 38,260円)
支出金額	125,592円(賃借料 21,670円 諸謝金 33,411円 旅費交通費 39,404円、印刷製本費 30,502円)

⑩ 法人の事業円滑実施のための活動

【事業総括】	
<p>① ・総会 2025年2月16日(日) 10:30~11:30 富士見文化会館及びオンライン (Zoom)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動報告会を年14回オンライン (Zoom) で開催し、審議・報告を行った。 ・事務局会議を年6回オンライン (Zoom) で開催し、事務局運営・事務所管理を行った。 ・年間計画を作成し、活動の全体予定を把握した。 <p>② ・会計については、月1回の会計処理を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年3回の会計締切日を設定し、予算の執行状況を確認した。 	
担当者	<p>●活動代表(理事) 篠原弘美 橘川真知子</p> <p>○スタッフ 内藤順子 松永雅文 清水睦美 角替弘規 池田喬</p> <p>(会計) 篠原弘美 清水睦美 小西永里子</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① ・総会：2025年2月16日(日) 10:30~11:30 富士見文化会館101号室及びオンライン (Zoom) 参加者 50名(正会員 79名)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動報告会：14回(原則奇数月) 20:00~22:00 オンライン (Zoom) 参加者：理事 16名 <p>② ・会計処理：月1回 部室</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会計確認(締め)：年3回(1月 10月 12月) 当法人事務所
収入金額	526,435円(受取会費 513,000円 事業収益 13,000円 雑収益 435円)
支出金額	294,941円(通信運搬費 102,839円 消耗品費 490円 水道光熱費 49,222円 租税公課 18,900円 保険料 4,490円 諸会費 5,000円 雑費 114,000円)